

参加者一覧 .....	02
連作欄 8首の連作 自由詠 .....	03
テーマ詠欄 「3」 .....	16
一首評 「そらよみ」 .....	19
短歌リレーコラム 「望遠鏡」 .....	20
リレーエッセイ 「いちごいちえ」 .....	22
次回予告・編集後記 .....	23

うた  
た  
そ  
ら

Utasona

＼3周年！／

2024.  
March

no. 19



宇	@hswe1t	鹿ヶ谷街庵	@ikasamabakuchi	御糸ちち	@MEATsachi
大坪命樹	@OotsuboMeiju	西鏡	@xi_zhen_jvUT	深影コトハ	@cotoha_mikage
大橋春人	@hachidz2	白石夜花	@yohana_no_sekai	水柿菜か	@naka_mizugaki
小仲翠太	@OnakasuITanka	寿司村マイク	@KHK5bNR4wv1wy8M	水也	@m_lya_o
歌島孟	@Sinn1990	たえなかず	@suzusuzuz2009	深山睦美	@57577_77575
がね	@amicus08	多香子		虫武一俊	@mushitake
酒井井戸	@kareido1111	武井窓花	@tanka_madoka	村田一広	@mucci2022
河岸景都	@kate_kawagishi	短歌パンダ	@tankapanda	森内詩紋	@Njg40Ev95jclRpu
かわはう	@suiikanikan_kawa	千原こはぎ	@kohagi_tw	杜崎アオ	@morisaki_ao
北谷雪	@kitaya_nisomisio	ともえ夕夏	@crossant_hey_z	杜野詩季	@4kitanka55
砧		中村成志	@nakam8	森屋たもん	@monsontanka
きまぐれおゆめ	@Oyukimagure	なべとびすこ	@nabeab00	悠佳里	@yukari_rito
君村類	@kmmr_r09	西淳子	@jacky244Ray	れいあむ	@Re14m_bot
香子	@kyoko_shoji	肺	@u_umii_i	臙	@rou_tanka
くうたか湖春	@Koharu_kura	袴田朱夏	@hakamada_shuka		
くろだたけし	@tkuro2016	廣珍堂	@hirochin_dos		
小泉夜雨	@kozumi_yau	笛地静恵	@Ymcx6rftjEZ9wq		
桜さくら	@WSJ59f8NwrfuJVq3	福山桃歌	@momoka_fukuyama		
佐倉麻里子	@mrkmrk1987	布武せいら	@ps2310201		
汐射ハルカ	@shiori_haruka	まよけ	@mskppompomtjuwz23		

計65名

たくさんのご参加  
ありがとうございます！

## 連作欄

# 8首の連作

自由詠

#うたそら

古刹にて

雨虎俊寛

バス停は行基さんから信号を渡ってすこし歩くのとき  
肩の上で黒髪ゆんゆん跳ねているきみは歩幅を大きくさせて  
均等に小さくならぶ白い歯がああね、ああねと語尾をつなげる  
忍辱山の手前でひとりバスを降りサバゲーにゆく羅利天おり  
山門で撮ったふたりにお返しに撮りましょうかと言われるふたり  
地域猫っぼさのあるきみ 血管が薄いまぶたにほのかに透けて  
手を合わすきみの背すじが可笑しくて(国宝仏とおなじ傾斜で)  
冬空をこぼして池の鯉たちは日溜まりのした色づいている

仮面家族

新井きわ

靴下の穴から剥き出す生爪は血筋なんですぐんぐんと春  
正気とね狂気のあはひにゐるわたし言葉の鈍でぶぶぶん、殴る  
兄さんの鷲鼻 すこし生きづらく壁にぶついたりしたでせう。好き  
澱んでる海のなかでの秘密だよゆまりを放つ父さんのまね  
サングラス波に奪れた父さんが「生きてるよ」つて足をびらびら  
今際のね祖母の声が鼓膜を揺らすどれみふぁソプラノか細きソプラノ  
シナリオが間違っていた君の死後、はりりと一人きうりを齧る  
弁当に過剰な愛を詰めてゆくアスパラ肉巻きてらてら光る

春隣

有村桔梗

ゆふぐれに取り囲まれてさみしさが細胞ひとつひとつに宿る  
誤字ひとつそのままにして送りたるメールばかりがなつかしくなる  
春隣 ひかりのなかに見失ふ花の匂ひの記憶をたどる  
わたくしはゆつくりゆかう いつまでも飛ぶことのないスワンボートで  
わたしたちは裾ゆらしつつ過ぎてゆく気のはやさすぎる春の匂ひは  
スカート裾ゆらしつつ過ぎてゆく気のはやさすぎる春の匂ひは  
ひとつあまる三連ブリンは真夜中のわたしのためのやさしさだらう  
はつゆきになつて戻ってくるでせう冬にかへつたひとのたましひ

隠れたり逃げたり人を騙したりしないと乗れない地下鉄がある  
 「で、どうするの？」世界を変えてみたくなるような声してずるいんだから  
 運命の人なんだったら掴んでよ 愛とか恋とか別のことでしょ  
 男とか女とか関係ないし君が石でもすきになったよ  
 深く深く潜ればふたりしかない ヒトでいるのも疲れてきたね  
 神様はいると思うよ バチだけを与え続けて笑う神様  
 地下鉄をおりれば外は現実で風が覚悟を促してくる  
 いつか磔にされちゃうそのときに笑顔でさよならできますように

## 開閉

池田竜男

タイトルが鯨の口で触れるとき子がうずくまるような暗雲  
 箱ティッシュ五個入りの袋引き開けて手紙の絶えた友思い出す  
 くしゃみだと気づいてくしゃみするまでに離陸しかけて着地する顔  
 鼻づまりに染み入ってくる銀杏のようだこの異国猿の目つき  
 高速がカーナビハックしてる間に大学受けるつもりと言った  
 似たようにサイドミラーを見るしかない目の不自由も折り畳まれる  
 洗い場で口論交わす懐かしい胸倉を見て手は開閉す  
 表裏ない電球に照らされる年老いてなおそっくりの父子

ボクたちはそういつだってアノニマスやるべきことをやりもせず  
 ボクたちは気付けば鳥籠いつのまに知らず知らずに大空捨てた  
 ボクたちはいつだって闘っている名前のない感情に揺さぶられ  
 ボクたちのホメオスタシスは狂ってるだからこんなにもアンビバレント  
 ボクたちはプロトシスに襲われてるだからこんなにも生き急ぐんだ  
 いつかくるシンギュラリティそのときにボクらも人間になれるのかな  
 ボクたちが人間になれたそのときに、最初に消えていく人は、誰？  
 とある朝、シンギュラリティが訪れた。人間は生きる理由を失った。

## 「忘却と想起と遊行」

石川順一

カワセミを「翡翠」と書くか「カワセミ」と書くかで迷い「翡翠」に決め  
 忘却は凄まじいもの今日食べしフランクフルトを今夜忘れて  
 アドルフは風呂場で何を考える二月はまだまだ春ではないと  
 風呂場ではハートショックが恐ろしいうるたえる我呼びボタン押す  
 名前だけ首相に似て居る人が居る戦前の思考を共有しながら  
 千九百三十六年二月には帝都の雪が凍り付く頃  
 ニラレバを食べて翌日カレー食べ今日フランクフルトを食べる  
 逆光にならずに済んでうれしくてそれでも奥は光の固まり

## 屋上猿部19

宇祖田都子

屋上に泉が湧いた私だけそっちの人類とのかけもちか  
 春一番舟がないから海を消すマスクはおやつに含まれません  
 コンパスを使ったことのない世代 猿を見たことないって本当？  
 屋上に鳩が一羽も来ない日は承認しないすごい計画  
 鳴り止まぬ鐘を無視して美術部の顧問がわたしの身体を盗む  
 沈黙をもって応えよ肉体を喰い合う午後の茶会のメニュー  
 良質な猿の餌にはなれなくて三年モノを淫らに流す  
 新しき藁敷き詰めよ 新しき藁とは全部君のことだよ

## 春ばね

大坪命樹

蝉声がうら淋しかるうちすでに含める花咲く春が恋しき  
 誕生日クリスマス正月誕生日結婚記念日 冬か楽しき  
 若ききみキーキが冬をば楽しめど老いぬるわれぞ寒きのみかな  
 寒き冬うせななむとぞ思へども猛暑を偲び炭素節約  
 株分けし小さき葉々がガーベラにピンクが花咲くこの春もがな  
 枝々のごつごつ黒き公園に一つ色あり 兆し金縷梅  
 蛇蟻<sup>むか</sup>出でざるころに帰省するきみよ Uターン土産に春を  
 今春がばね係数ぞいかほどか 気象が鍾<sup>おもり</sup>のみ増えぬるを

## ジープンを穴が空くまで履く人

泳二

ジープンを穴が空くまで履く人だ手は柔らかかであいさつは小声だ  
 窓からの景色大きくなる音にいつもの場所がわからなくなる  
 雨上がり何かが始まる約束にただ遅れないように歩いた  
 大切なものを半分くれるので春が待ち遠しくなる通り  
 水槽のメダカを覗く横顔と秘密を洩らしそうなくちびる  
 大切じゃなかったものが大切になる真っ直ぐな川治いの道  
 いつか来る季節をふたりゆらゆらと光る水面に見ているだろう  
 いくつかの波紋ができてこの場所にまだ居てもいいのかも知れない

## 毒沼

大橋春人

雨粒を掴もうとして国道に飛びだしそうになった愚かさ  
 立春を遠く離れて全国にロツテのコーヒーガムの復権  
 ベランダにしばらく見えない雀らのもうすぐ春だ帰ってきなよ  
 閏年 あと二ヶ月で八歳の五倍の時を生きてしまった  
 布団より優しい国はありえない渴いた夜はセルフハグせよ  
 レプリカの洞窟をくれ二十一世紀歌人の遺跡になるから  
 節水を呼びかけている看板に降りやまぬ雨 ここやないやろ  
 内面に立ち入るなかれ踏み込めばみな毒沼に沈めてくれる

遠い異国を行くワタシ

歌島孟

沈みゆくほどに多くを身に負うて遠い航路を行くのだ、船も  
煬帝の罪は深く、ゆく河の流れは底を隠して光る  
陽は独り空高くいて、うつむけば、影は異国の土に寄り添う  
湖水からやわらかい風 生ぬるいビールのように喉元をゆく  
心無い男じゃ。心の臓が無い比干よ、空苳菜がおいしい  
痩せこけた猫を追いかけ、すり抜けてゆくようにして夜を歩いた  
タクシーは鼻歌まじり 開け過ぎた窓から顔へ吹きつける風  
無くなったものは見えない。崩れゆく壁の凹みにかかる月影

第3楽章

がね

Andante 気持ち良いから変われない動物園の猿山を見る  
Grave そして真夏に遺された蟬の死体がベランダにある  
Adagio 大人になっても給食の隅のトマトがずっと酸っぱい  
Moderate 蟻が運んでいる蟬の死体は蟻の栄養になる  
Animato 甥っ子を見るお父さんがじいじになって波打つ湖面  
Lento 日がひっくり返って月になるわたしがわたしに産む物語  
a tempo 辿りついても開かないメッセージボトルを踏んでいる  
死に絶えるように歌えば終曲の終わりが終わる perendosi

東京巡り

涸れ井戸

ビル街を遠回りして図書館に旅の隙間の有効利用  
新宿のカプセルホテルチェックインいざデイリーの浮き草暮らし  
バスで行く砂町銀座うどん屋の閉店時刻やけに早く  
波郷碑のたもとの橋を横切って今、ぼくは夜景の一部分  
西の市素通りできず大衆に同化するの喜びなのか  
黒人の親子二人が振り向いてにこにこ笑う地下鉄ホーム  
行ったことない街の小さな画廊元介護士のオーナーと逢う  
連休で混み合っているのぞみ号旅の終わりはわたたわていい

つるぎを持たない

河岸景都

勝ち取った宝物さえ手放して聖者は籠を置く人のこと  
正しさを叫ばないよう噤む口 わたしはパンを水で飲み込む  
友達を一人も傷付けない誓い誕生日には言う「おめでどう」  
息継ぎが上手ではない生き物に光合成を説く残酷さ  
瘡蓋を誰より派手に塗りつぶすわたしを探す目印として  
題名を静かに飾るカリグラフィ、誇れるような指の優しさ  
空白を埋める単語を探すたび耳奥で鳴る正午の報せ  
心臓を赤いインクが過ぎてゆくつるぎを持たない手を振りかざす

人間

かわはらう

鳥人間 背中に翼が生えており飛ぶより歩く方が楽しい  
犬人間 並外れた嗅覚を持ち鼻栓を常に装備している  
亀人間 背中に背負った甲羅には手足も頭も入り切らない  
猫人間 好きな時間に寝て起きてフレックス制で働いている  
熊人間 はちみつよりも鮭よりもチョコレギサラダが一番好き  
蛸人間 足と足とが絡まって徒競走ではいつも最下位  
牛人間 ファミレス行くと絶対にサラダうどんを注文する  
人間 顔の見えない相手には何を言ってもいいと思ってる

文字渦

きまぐれおゆき

渦まいた禍禍しさを鍋かぶりやり過ごしてく蝸つぼく  
絵のなかへ探偵事務所へ異世界へ知識へも飛ぶ本の翼面  
ひかりのほん置ける棚ならイチオシのシリーズあります晝日中です  
はつあまやまにもしついでにまきかきおまわりのでやまははこひま  
口 回 品 器 當  
故郷には全周アンテナまわってて里ごころなるパルス発する  
風からねムダ毛ぬいたらかけらつぼい虫がでてきてこまってまして  
占いは道にもぞもぞする虫を追い払うため噴く殺虫剤  
いまはただおねむりなさいあたたかく繭という繭みぎにたおして

はるかぜ美容室

氷谷雪

木曜日クーポンは味方みずからを労わる理由のない毎日の  
「なんとなく退屈」「退屈なんですわ」復唱ばかりの担当鈴木  
額さえ晒して化かされるように鏡のなかの文字盤を読む  
手のかたち頭のかたち ところと流れる水に髪を委ねて  
恋慕とは思われないようブローする手首の滑らかなこと褒めたい  
偏見のないふりをするただ虹を見つけたようにタトゥーのはなしを  
ドアの閉まる音を背に聞く次与会うときまで互いを忘れても良い  
鈴木言うへぎりぎり結べる長さでは結べた試しが無いな 春風

冬の嵐

君村類

白地図へ少しずつ線を引くようにこの町だけの大雪警報  
ワイパーを丁寧に立てる避雷針なんて持たないからだであまれて  
罰をまだ求めてしまう深い深い轍にスタックする車たち  
警報が解かれた直後の真夜中の無風の音を心臓と聞く  
できるだけ長く黙っていたあとの息継ぎとして新雪を踏む  
聞いてほしい言葉はあった 何本も氷柱を落としていく自殺行為  
捨てていく雪は確かに汚れていて記憶も触るところからあやふや  
春服とチョコを売っている店の他は陰気な二月 わたしも

## 加古川にまつわる幾つかのこと

香子

「加古川に行くならいつもの頼むよ」と主人のいつもは清酒・盛典切り飛ばす覚悟で打つ飛車まっすぐに片道切符で会いに行こうか  
車窓から見える看板の「079」市外局番は再会の合図  
1秒も無駄にできない気がしてる君に会う日は少し駆け足  
この街は過ぎる時間が倍速で宝箱には収め切れない  
285/Kmの速度で離れる棋士のまち「また会えますか？」聞きそびれたまま  
お帰りと我を迎える夫ありて歴史重ねた星に帰還す  
君でなきゃ果たせぬ使命そこにある遠き星座の輝き願う

## 家

くろだたけし

しまわれた頃の日付けの新聞で包みなおして使わない皿  
微笑んで踊るポーズのままずっと押し入れにある日本人形  
思い出もいつかはゴミになるけれどまだゴミじゃないうちは思い出  
未使用のテレホンカードをリサイクルショップに売れば五千円ほど  
自転車が「新品だった頃もっと自慢されてもよかった」と言う  
雨のたび屋根の汚れは落とされてでも少しずつ古くなる家  
戸や窓ががたがた鳴ると身構えるだいたい風でときどき地震  
もう誰も使わないから捨てるしか色の足りない色鉛筆は

## うつし世

小泉夜雨

すごい雨の降り方をする街にいた話をして、そのときの静寂  
スワンボートいつまでも漕ぐ端っこのいつも何か言いたいような顔  
ふるえつつ水面は光りまくるから死なないことが美しくなる  
遠くの火事をみて目を逸らす日常のわたしがわたしの敵、だとしたら  
赦されてきたという自負だけでしょうあなたを生かすこのうつし世は  
転生をしてもいいけど契約はしてねと実態のない政府が  
いのちが輝くというのはほんとう銃弾が硝子を砕く精度のように  
夕闇はまたたく間に広がってゆくそれから鳴き止まない遠吠え

## 如月夜嘯

桜さくら

帰りに甘味をつまむ指をみる闘いおえた白い指先  
この国の菓子の豊かさスーパ―に平積みにある冬のチョコパイ  
ゆえもなくご褒美にする如月のデパ地下にくる世界のシヨコラ  
梅の香の微かな夜に週末の温泉行きのLINEが響く  
それぞれの蟹身をつつく夕食に日本酒族の果てなきグラス  
朝粥のブランチをして帰路につく 三十代は肉食だった  
「軽くなら罹るのもあり」同僚とひそかにねらうコロナ免疫  
からっ風に五感を閉ざすとき過ぎて春のライブの予約はじまる

## パラソルチョコレート

汐射ハルカ

タクシーを途中で降りて白い息あなたに買ったアセロラジュース  
星屑はまるでぼくらに微笑んでつきない夜がさみしくないね  
楽しいよこんな隅っこ個室とはよべない席であったと近い  
思い出す最初のよこがお照れてるの？石狩街道周回してる  
だんだんとあなたは酷く冷たくてこんなに陽射し暖かなのに  
ももいろの刃もてきみ抉り出せわたしが夢の底に在るとき  
後悔をしているよまだ渦巻いてどうして別れ切り出したのか  
日常の流れの中洲ひかる粉意識の隙に漏れ出しただけ

## 橋脚

西鎮

ほろほると烏賊の沖漬け食んでゆく二月の部屋は旅の匂いす  
鈍色の街区をゆけばひとりにもこんなにあわく降る順光線  
もう能年玲奈と呼べない俳優の声も波めく三陸鉄道  
少年の蒼白きその焦燥を刻んだ窓として自画像は  
球根はおそらくラップサイセンでいつかの失言みたいな軽さ  
また来る、と誓うみたいに言うきみを臨時列車がみ込んでゆく  
風いだ日にときどきみえるきみというダムに沈んだままの橋脚  
おそらくは先発隊が飛びたつて湖面は春を映しはじめる

## 犬の名は

鹿ヶ谷街庵

湿ってる、健康だねって俺の鼻さわって笑うきみが好きです  
永久に気球が浮かぶ奇跡でもあればうつむくこともないのに  
フカヒレを食べた呪いのせいなのか海馬に鯨が群がってくる  
ファミコンのソフトに残る噛み跡がわが家の犬の遺品になった  
愛だった キャラメルコーンを真夜中に買いに走った頃のすべてが  
うつくしいソ連映画を観たあとにテレビが映す燃えるひまわり  
ていねいに海老の背わたを取るように黒い歴史を消した履歴書  
コーヒーをこぼしたいいつも暗がり飲むからいつもこぼしてしま

## ルポ・コールセンター

寿司村マイク

ルポ・コールセンター同じ番号で二度目の無料お試し請求  
ルポ・コールセンター嘯まずにドモホルン・リンクルです、と言えた森さん  
ルポ・コールセンター低音重視した夢グループのCDラジカセ  
ルポ・コールセンター生き別れの兄の声で呼ばれる「元氣してるか」  
ルポ・コールセンター冷凍蟹を売る㊦駒田航のささやき  
ルポ・コールセンターフロア全員がオレオレ詐欺のかけ子で逮捕  
ルポ・コールセンターロシア原潜にオペレーター打ったピンガー  
ルポ・コールセンターきみの声だけを 二十四時間受付中です

ワンダフル・エトセトラ

たえなかず

聡明な君の瞳に撃たれゆくために真昼に丸腰で逢う  
なんとなくキジトラ猫のとがる爪いずれ聖母となり横たわる  
バツィングセンター 夜更けの空振りに流れる銀河を残像と呼ぶ  
平たんな世界を歩く 善人は死ぬまでにあと何度恋する  
雑草の呼び名があつて恋人の彼女の呼び名がない世界線  
春の隅 ダークでディープなクレンジングオイル女優のごとき涙が  
どうか君 カレーは今も大盛りであれTシャツは新緑であれ  
パーカーのフードは子猫が入るほど膨らみ春の風やや強し

子猫のよつに恋をして

多香子

ウサギさん遅刻だ遅刻とかけていく私は追わないアリスじゃないから  
換気にと小さな窓を開けたすき飛び出た猫が戻ってこない  
桃が咲く土曜の昼はうるわしく私ひとりの鍋焼きうどん  
風花が冷たいことも知らないで今年生まれの子猫は眠る  
特別な人だとずっと思つてた、春風ふいたらみんな忘れた  
竹芝の棧橋に君を送る朝 東京湾にはぐれ雪降る  
時がまた扉を開けて流れゆく私の全てを消し去らないで  
さくら草あなたが好きと気が付いて今夜の夜行で逢いに行きます

わたしはスズメ

——『王様戦隊キングオージャー』より——

ともえ夕夏

兄様は民を愛せばあめつちを愛せば国の王となりたり  
花嫁になりぬるわれのうつくしき覚悟をとくと見送り給へ  
かのひと覚悟のなかで生きてをりわれの探せし恋こそここに  
嘘泣きのうらがはにある泥臭きまことをきみよ聞きつけまほし  
米も麦も豆も菜もある食卓に兄様ひとときは高く笑ひぬ  
指環には愛の詞の彫られけりともに墮ちばや地獄の果てに  
われこそは気高きシユゴツダム国王ラクレスハスティその妻なるぞ  
血潮熱き愛するひとはわが胸にさそりの毒で暫し眠りぬ

土下座

中村成志

網棚が網の棚ではなくなった頃の物語です あかつき  
噛み付かれ捻られ肩を剥がされる心地のなかの寝汗の蒼さ  
そうめんを二束茹でたときのよう陽の泡立ちが山に流れる  
くらがりの胴へマッチの火を移す灯油の匂い朝が震える  
パックからグラスへ注いでゆくときの橋のようなる牛乳の艶  
厳寒の車輪に研がれ内側の、内側だけのレールのひかり  
天空の糸いっせいに断ち切られ人は崩れる土下座のように  
ポラロイド写真一葉貼り付けて重さを増せばノートの皺よ

うつくしい傷跡

武井窓花

安心はなぜいつまでも怖いのか睫毛についた虹をみている  
もしもあの左を選んでいたら、のもしもが君を傷ませている  
昔した怪我の傷跡ならあつて紛れもないこれがわたしです  
なぜこんな人生なのかと思う日もあつたしあるしただけ続いて  
避けようのない現実はずんこくね祈りのために手のひらはある  
いままさに何処かでひびく助けての小さな声もあるというのに  
今日は風が強いねどうか少しでも温かくして眠って欲しい  
生き抜いてきた自負はあるそのことをうつくしい傷跡と呼びます

早春

千原こはぎ

春みたいな声って思う あたらしい季節にであうあたらしいひと  
はじめての映画もランチプレートも芽吹くなにかを分け合うようで  
(すこしだけ早足だから) いつもより速い鼓動の言い訳にする  
この今を切り取るように窓はあり音もこぼさず見ているふたり  
横顔の輪郭だけをぼんやりと辿る なんにもいえそうにない  
行く道は晴れてほしい ゆれる背がすこし陰って見えて ふれたい  
一滴のことばで零れてしまいう水面にさざなみは広がって  
夕焼けをふたり見送る早春のそのあとはわからないままでいい

順光

なべとびすこ

ももこの毛布のなかにいるうちは部屋の寒さを知らずに済んだ  
アンメルツヨコヨコたぶん地平線見ないで死ぬんだろう今世でも  
こんなにも読みたい本がある部屋でいま読む本が一冊もない  
自転車に乗らない日々で抜けていく空気のように忘れるだろう  
現実を現実として飲み込んでいくのが大人ならもう大人  
前年比プラスアルファの基本給いつか僕らも鉱石になる  
手袋が結んだままで落ちていいるそれはハッピーエンドのかたち  
カーテンを開けてもどうせ似たような光だろうな カーテン開ける

太陽系第3惑星

西淳子

ゴー☆ジャスの人さし指のように降る隕石。まだ助かる、マダガスカル  
テラバイト。地球のバイトは大変で80億を一人で回す  
「ちきゅうなげ」を「至急泣け」って空耳してゲリラ豪雨は女優の演技  
地球儀にキスするくらい今、わたし全人類を愛しています  
隕石と地球のキスを見るために彼女は宇宙飛行士になった  
地球グミを食べた佐々木が「本物のほうが美味かったよ」と微笑む  
ブックオフ火星店にて買い取ってもらった僕の『地球の歩き方』  
青い地球 NO MUSIC, NO LIFE? うたう。(ぼへたき) TOWER RECORDS

天国なんかじゃない

肺

約束の消えてしまった手触りの話がしたいなら水面で  
リンスインシャンプーなんて使うから接点のない海が枯れるね  
夜通し雪を慰めている 遠くまでゆけないこともわたしの誇り  
赤林檎 濡れて寿命を知りたがるあの子の口はいつも教会  
みんなして劇だったのか沈むほどきれいにみえる正しさなのか  
炭酸も消えるほど手を繋ぎたい 愛に容赦はしない火だから  
天使さえあなたの前に敵として幾夜も現れる よろこんで  
買う前の花束だけが無垢なこと うれしくて何度も買いつくす

うそ

袴田朱夏

ほつぺたのぺたをわたしにくださいなあなたのほつがよくみえるよう  
ずるいずるいあなたはミルクたつぷりのコーヒーそれをコーヒーとよぶ  
完治しないのがわかるってどんな気分？ 右腕を上げたら下ろされた  
ゆうれいをやめたら雲になりました、見えるでしょうか、消えるでしょうか  
あそこまで行くから月は軽いでしょ、つかれた？ わたし？ 天使じゃないよ？  
主人公だから死なない主人公だから死ねないだから死にたい  
実ったら枯れるのだからわたしからうそになるまで言いつづけるね  
天国にごはんはあると思うので味付けのりを持たせてください

入マホの裏

廣珍堂

みんなとは違う願いの君の手はスマホの裏でふるふると揺れ  
林檎へと吸われてしまえ膨らんだスマホの裏の消したい記憶  
机にはスマホがぼつり忘れられ裏向きのまま待つひとがいる  
高齢者たちもスマホで払い終え村のコンビニサロンのごとし  
座席にはスマホの裏と冷えた手が並ぶ七時の準急電車  
乙女らのフリックの指と嬌声にスマホの裏の指が嘘だよ  
教師へとスマホの裏を見せている生徒が並び倫社反乱  
ラーメンの汁がスマホの裏に付き表の「LINE」は返事が来ない

散歩は三步から始まる

笹地静恵

クスリなどいらぬボクのアタマにはポアンぽあんとポアンかれする  
狒犬の左右に並ぶ石の橋わたりて石の社へ到る  
ひとのいない公園がすぎ夕がたのいつもふらりとたたずんでいる  
地下鉄のあるはずのない小都市の地下鉄に乗り飲み屋で下りた  
雨あしと女と別れホテルにはベッドに眠る薔薇と人形  
なにもない干潟を走る列車からデッキへ風の乗っては下りる  
どうしてか思い出しているネコ肉屋ドリトル先生オシツオサレッツ  
ヒダリジンゴロウ作ねむりねこ眠っていないとぼくは感じた

ダイアリー 24/02/29

福山桃歌

しっとり湿っていそう じゅんじつと読んでもいいと初めて知った  
ランドセルだいぶ小さくなったなあ見送る子らのたくまじきこと  
ぬるぬるとホームに停まる朝九時の電車 澁んだ表情映す  
学年末試験二日目 しずしずと机間巡視の形式守る  
着実に解答欄を埋めていく君の歩みよどうか止まるな  
採点は戦いだからとつときのラジオの録音片耳で聴く  
ぼんぼんと弾むボールの足取りで おかえり 今日もよく生き延びた  
「春ってな、あつたかい日がつづくんよ」知ってる、春はきみのほつぺた

赤い店

まさけ

ファミカセを売ってる横で雀牌とヌードランプ売る赤い店  
コスモスは教訓を売る自販機だ 何かが違うキャラの消しゴム  
親友の自慢のヘラクライストがロッチであった時の悲しみ  
『ラファ・スン専用モビルアーマー』大人ってのは難しいんだな  
空き地には土管があつて土管にはエロ本があるという定説  
兄ちゃんが薬局脇で買う箱をチョコと思つたそんな夏の日  
あの頃の何かを清算するように肅々と進む区画整理  
おそらくここが跡地だ 墓標めく赤いとまれが佇立する場所

雪の東京

御糸さち

キーワードさきやくようにゆれながら 木は 木は あわく影をおとして  
患いし者の訪いしんしんと待つ夕刻の星医院  
東京の雪の予報は信じない 令和もドライヤーはうるさい  
イヤホンの左右をスマホの灯を以て確かめている 未来にいても  
しらしらと夜は去りゆく引退でニュースになれるコンビはいいな  
夢だけど雨はしつかり冷たくて夢だからって油断していた  
雪の朝めざめれば子がもういない毎日遅刻ばかりする子が  
でんでんと並ぶ車のその全てツノ出し槍出す雪のパーキング

乙女は変態する

深影コトハ

讚美歌の響く学舎の放課後のあめんぼあかいなアイスクリーム  
演劇部・活動場所「礼拝堂」は飲食禁止（※バレないように！）  
車座で読み合わせする人形の台詞は誰が読んでも悲しい  
わたくしを綺麗に死なせる演出を放課後マクドで話し合ったね  
男には触れさせたことのない頬に薔薇色を挿して男役の子  
口紅を落とさぬようにストローで水を飲む蜻蛉の乙女ら  
舞台袖の影のあわいに十代のひかるたましい産みつけてゆく  
役という短き一生終えるたび乙女は何度も変態をする

透明な天使へ

水也

風の日におもうあなたは天の国しあわせですか願えはしない  
 ひとりでは叶えられないお願いをここにはいない花へと捧ぐ  
 天使とか鈴だとかいう なぞらえて生きていければ忘れられたら  
 まるやかに落ちていく春、涙して青に染めてと己に縋る  
 あなたがた幸福そうでまっしろで見せてくれるのうるわしさだけ  
 紫陽花の色に重ねて塗った爪欠けた花びら枯れていないの  
 刺草を、いいえ造花を編んでゆく痛む指から花冠を  
 ぼたぼたと雫が落ちる透明な羽はあなたでかたどられている

雨ちやない地点を探せ

村田一広

雨ちやない予報ないかとネット上探したら一つだけ見つかる  
 まだ早いと思つて買ったその晩に冷え込みが来て毛布を使ふ  
 この位ゆつたり聴きたいコンサートこの列に座つてるのは僕だけ  
 お弁当コーナーよりも鮮魚コーナーに置かれて美味さうな寿司  
 掘り起し掘り起しても何も無いパニアアイスそのものが宝石  
 JRの気分次第で特急にも急行快速にもなる臨時  
 田舎の駅はいよいよね向かひのホームまで線路の上を歩いて行ける  
 ここに来ると高確率で雨が降る雲の集まりやすい廢墟

架空の法律

深山睦美

掛け軸に不吉と書いて掛け軸の縁起を消した者は処刑す  
 広告をずっと見ながら生きている安い眼鏡をかけているから  
 おままごと中になされた犯罪は架空の法で罰するべきだ  
 おままごと協会理事の会見はどこか現実味に欠けていた  
 ラーニーはどごだと言おう そうだよ、業界人も誰が好きだよ  
 西洋の甲冑を着た元カノが敲く月下のオートロック扉  
 セーターをハンパーガーに着せないでハンパーガーは寒くないから  
 ペンギンのいない動物園だつてやれるつてどこみせてやろうぜ

これは「うた」

森内詩紋

言い切れることは僕には何も無い だから無言でじっと見つめる  
 正しさは大事だけれど人間は正しさだけで生きていけない  
 君はまた僕を離れていくだろう遠い渚に飛び立つだろう  
 僕たちが社会と呼んでいるものはただの枠組み 持続のための  
 理解するために話そう話し合おう決して理解をされぬとしても  
 真つ直ぐに生きようとしてふと気づく 歪みが無いという不自然に  
 詠うことだけを頼りに生きている手放せば楽になれるはずでも  
 これは「うた」？ ええ、たぶん「うた」僕だけの、いいえ、あなたの、そして、みんなの

揺られて（肆）

杜野詩季

拾われて実家に着けば妹がわらわら出てくる顔を歪めて  
 避難所でおにぎりを持った手がやつと湯呑み茶碗の熱を喜ぶ  
 二時間の発電機タイム テレビには同じCM何度も流れる  
 被災者という当事者になったから何回も書く「罹」という漢字  
 微動だにせずにニュースに見入ってる 原発、建屋、原発、建屋  
 一覧に知りたる名前見つければ数の多さに目が追いつけず  
 トイレ用風呂水なくなりバケツ手に河原を降りるご近所さんと  
 （まず先に春の光は北陸に長く遍く暖かく降り）

育ち合う毎日

悠佳里

時短でも負う責任は変わらない抱える重さは17人分  
 担任同士声かけあって助け合う手をひっぱって背中を押して  
 ついほつぺをぶにぶにしちゃう太ももに子どもがギョツと抱きつく間  
 目を浴びてびしょ濡れになって虫飼つてそんな私もキラリじゃなくて  
 「先生もママなの？」 そうだよ自分の子と同じくらい君が可愛い  
 手のかかる子ほど忘れられなくて目の前の子もきつとそうなる  
 保育園で一緒に過ごした毎日が未来で力となりますように  
 4月からの成長思い見上げれば3月の空は美しい青

basket

森屋たもん

朝食はパン派？米派？自らに問い続けて生きる蝸牛  
 水分と熱だけを摂るファイファンにお湯属性の攻撃は無い  
 ヨーグルトの賞味期限は二週間つて決められていいなと思う  
 ウソじゃないことだけ言つて生きていく昼休み終わりに埋めたブルー  
 地下道の中に小さなコンビニがあった上より良いパンがある  
 私達は命を食べて生きているリポD以上モンエナ未満  
 豚肉を買つて帰るとメモ帳に書いたから存在する豚肉  
 ソフトクリームを載せたコーンにとらうもろこしは入っていない判っています

夜半虫

れいあむ

墓石の中に十月桜見ゆ扉の前では黄帽子の群れ  
 百日紅白くひらいて桃と咲き知られず生きて見られず生きて  
 しはぶきの数だけ夢の人のいるこの教室だからできる呼吸あり  
 猫のよにまるい瞳をした教え子にナズナの太鼓拵えてみる  
 おなじみの「きえたい」というLINEきて雨の音すべてBとなる夜半夜半  
 待つ雪の空の昏く遠いこと『雨ヨ』と書けど落ちるは滴  
 山ほどの葉を囁んだ背をさぐり引つ掻きすりすり。積もれ、雪花。  
 やさしさに躰を喰われる人ひとり物思ふ春されど世は春





言えないよきみの背中が遠ざかる春時雨ふる三月の嘘

3級は中卒レベル 合格で十五の自信を得る三十五

まだ胸がそつと揺れてる三年目あれからきみはどうしてますか

角砂糖ひとつを夜にしづめたる三月生れの刺客のゆびよ

話す声笑う声不機嫌な声死んでも耳は聞こえてるから

柿の葉が落ちて実が成る野比のび太めがね外すと3があること

メロデイが鳴りだしもう間に合わない3番線からサヨナラです

三日前麻婆豆腐を食べて居たブロッコリーにはドレッシング掛け

トリニティー指先そして耳朶と鼻先は冷たい黙示録

三年は長すぎたよねでも楽しかったねだから長すぎたよね

もうやっとな春になったと思うから3月をなぞる指先に蝶

三密が禁忌だったねあの冬も肩寄せあつてたよねヒヤシンス

三日月を手に抱き立てる鉄塔の夜天に深く黒い骨格

作り置き何時でも残る三杯酢蟬が羽化する前の静けさ

三月の寂しさばかり受け止めて空は別れの歌を覚える

週末の晴天を祈るまいにちは3ポイントシュートの軌道

一人づつたちてゆくのか春霞こたへはつねに三なりけるを

◆ 碧乃そう

◆ 麻倉ゆえ

◆ 雨虎俊寛

◆ 有村桔梗

◆ 井倉りつ

◆ 池田竜男

◆ 十六夜ノ朔

◆ 石川順一

◆ 宇祖田都子

◆ 泳二

◆ ㊦

◆ 小仲翠太

◆ 歌島孟

◆ 洵八井戸

◆ 河岸景都

◆ 氷谷雪

◆ 砧

ヨーグルト三個ならんでよりそつて賢さが持つ少しのずるさ

上靴のうすい名前をなぞつては延命措置とする三学期

怪人は幕に紛れてこれまでに人を三回のみ込んでいる

有名になりそうな人第3位だから捨てない卒業文集

いくつもの日々を越えてく明日もまたピンストライプ背番号3

三人で夜桜をみた帰路ひとり自分が助演だったと気づく

三叉路で右か左か選べないまま見送った君と太陽

わたくしとあなたと子猫世界一幸せになる三角関係

夜明けすぎ波に慌ててあほうどり飛ばしてしまふ風は三流

これまでとこれからをすべて信じた三月きみは旅立ってゆく

子の頬の三倍ほどにふくらんでそうかうまいか筍ごはん

三月がまた心臓を落つこととしていしょうがないんだからうづくまる

井村屋の社員のおよそ3割が小豆洗いと友達らしい

三三三川三三三川三三三川三三三川三三三

これをピタゴラスの定理を使わずに解けと睨む、小学生のみ

秘数3、あるいは暗き道ばたに遊べるものをひどく恐れぬ

三月のきみはかるやか遠くまで飛んでくための助走をつけて

◆ 君村類

◆ くうたか湖春

◆ 小泉夜雨

◆ 佐倉麻里子

◆ 汐射ハルカ

◆ 西鎮

◆ 白石夜花

◆ たえなかず

◆ 短歌パンダ

◆ 千原こはぎ

◆ ともえ夕夏

◆ 中村成志

◆ 西淳子

◆ 袴田朱夏

◆ 廣珍堂

◆ 笛地静恵

◆ 福山桃歌



焼きそば麺3袋入り ちょうどいい量になる日を夢見るふたり

3日前当てた3連単よりも彼女の「はい。」が欲しい早春

サンドイッチをパンに挟んでサンドイッチサンドだ(サンドと三度は言った)

ちゃん付けが取れて戻って三度目の春の表面焦がしてゆけば

3時からの40分間ありのままの自分でいられる診察室

誰かには傷をつけてはいけなくてみつつの規則矛盾していた

ドードリオは寂しからずや三倍の孤独を抱へ荒野を馳せば

思い出し怒りのなかの教室の三月生まれだけ間に合わず

三段式寝台下段ヒーターの上に寝かされて熱い 眠れず

忽ちに3年が過ぎ我が子にも髭が生えたり大人のごとく

三つ折りの通知はきみにひらかれるためにとびらとして春にくる

三という割り切れなさを呑み込んでコンビニで買う新作菓子パン

自転車をのんびり漕ぐよなスピードで春が近づく3階の窓

居残りの代理はいつも三角錐ひらいてみれば花にも見えるが

いたいほどおどけるひとでくちびるを3にするからすぐにわかった

◆ 布武せいう

◆ まさけ

◆ 御糸さち

◆ 深影コトハ

◆ 水柿菜か

◆ 水也

◆ 深山睦美

◆ 虫武一俊

◆ 村田一広

◆ 森内詩紋

◆ 杜崎アオ

◆ 杜野詩季

◆ 悠佳里

◆ れいあむ

◆ 臙

視線だと思って待ってみたいけれど穴じゃないかと思ってもいた

くろだだけし

確かに「視線」と「穴」はその外観に止まらず、性質や本質の部分で互いの存在を補充しあったり、同一性が見いだせてしまったりする関係にありそうだ。主体に待つことを意識させた存在が、視線なのか穴なのかは、歌を通して結論の出るものではないのだろうが、前述のような種の発見とそのことへの不気味なまでの説得力に浸ることができるところこそが、この歌の魅力なのだろうと思ふ。

ゆきちゃんの前では可愛くなかったし  
ゆきちゃんもかっこよきはなかった

白藤あめ

八首全体を見るべき一連。一首ずつ細かに見るだけではどうにもならない連作がたまにある。「ゆきちゃん」への思慕、思い出、苛立ち、憎悪、無関心、願

い。読むのでなく、題名を含めた全体を眺めるだけで「ゆきちゃん」が叢のようにこちらへぶつかってくる。これが事実に基づくのかフィクションなのか、ともうでもいい。読み手は、ただ「ゆきちゃん」に打たれ続け、言葉を無くしてゆくだけだ。

一首評 中村成志

西鎮

一首評

確かめるように歩いて立ち止まり今日の  
目印のため手をとった

泳二

時系列順に動詞が並んでいて、読み進めると、否応もなく押し流される感覚を覚えます。時間は戻らないし止められない。生きていけば誰しも時間に押し流されてゆく。だから「今日の目印」はささやかな杭であり、それを共有する一瞬のかけがえのなさが切なく浮かび上がりました。

笑うのではなく微笑んでいる バカ尾根  
をきみはかろがろう上っていった

雀來豆

バカ尾根とは単調で長く、歩くのが馬鹿らしくなる尾根のことで、丹沢の大倉尾根などが該当するらしい。それを踏まえると「上って」がいかに適切で、先をゆく「きみ」の飄々とした様子がどれほど眩しいかがよくわかる。となると上句の微笑みはきみのものとも思えるし、その人と行動をともにする主体のものでもあるようにも感じる。いずれにせよこの状況の楽しさはきみによって生み出されており、その全幅がかかるがろに託されている。

絶唱はややソプラノで目を丸くしてる息  
子とおなじで、まだ

まさけ

六年間一度も鳴らすことのなかった防犯ブザー。その音を最後の思い出に聴いてみた息子の様子と親の思いが詠まれている歌。四首目で息子が防犯ブザーの音のことを「声」と言っていたのも詩的なんだけど、この歌ではそれを踏まえて「絶唱」と表現していて素敵だなど思いました。結句の「おなじで、まだ」も倒置が効いていて好きです。おやすみをすすめる防犯ブザーとこれから成長して声変わりもするであろう息子の対比が表れています。

西淳子

一首評

小泉夜雨

一首評

杜崎アオ

一首評

# 短歌リレーコラム 望遠鏡 19



書き手

秋山ともす

短歌にまつわるあれこれについて  
自由きままに書くページ  
今号のテーマと書き手さんは…

## テーマ 57577展の

うらばなし

二〇二二年一月二十九日から三月二十七日までの二カ月間、町田市民文学館ことばらんどで開催された「57577展」。約五千人の来場者を記録した短歌の展覧会が、早くも第二回開催をこの春迎える。二〇〇六年に開催した町田市民文学館の歴史の中でも、同じタイトルの企画展を二回実施するのは初めてのことだそう。それだけ反響と手応えがあったと言えるのだろう。同館学芸員の山端穂氏にお声掛けいただき、「57577展2nd」の展示デザインとアートディレクション

う場合もあるだろう。反面57577展では、連作を展示するには十分なスペースが確保でき、面積の制約を心配する必要はほとんどなかった。紙面の何倍もある壁面を自由に使えたのだ。そこで、最大十六首から成る岡野氏の連作の数々を、壁を覆うほどの生地（ターポリンと呼ばれるビニール素材）に印刷し、つなぎ目なくひと続きに読めるようデザインしていった。連作としてのかたまり感を維持しながら、行間も程よく設け、かつ目線の移動が極力少なくなるよう心がけた。文字は黒二色、フォントはすべて一般的なゴシック系。文字以外の要素を取り入れるべきかは非常に迷った点であったが、岡野氏の歌から感じるさまざまな“色”を表現したかったのと、空間としてのストイックさや淋しさをなくしたかったこともあって、「音楽」の表紙から着想を得た柔らかなカラーのグラデーションを随所にさりげなく配した。ただし『Ray』という連作についてのみ、可視光線を連想させるような多色づかいの文字デザインとしている。今思うと、外光が届かない展示室の中で、自然のひかりを擬似的にでも表現したかったのかも知れない。

最後に触れるのは、木下龍也氏の展示スペースについて。岡野氏と同様、事前に展示内容も引き続き私が担当させていただくこととなっている。第一回を振り返ってみると、展示デザインを思案するにあたってまず留意した点は「そこでしか味わえない体験」をつくることだった。参加歌人の皆さまの作品を、歌集の紙面とはまた違った楽しみ方で表現する必要があると感じていたのだ。一方で、歌人の方々と打ち合わせを進めていく中で印象に残ったのが、出品歌人のひとりである岡野大嗣氏の「デザインが短歌を超えないようにしてほしい」というお言葉。主役はあくまで短歌であって、デザインがその魅力を活かすに演出してはならないという核心を突いた助言だった。歌集と同様に、読み手へ届けるための短歌の最良の姿と、歌集とは異なる展覧会に相応しい短歌の新たな側面、そのどちらも具現化することで初めて、詠み手も読み手も満足していく展示になるのだと理解した。限られた予算の中で、というのもクリアしなければならぬ課題であった。

具体的にどんな展示デザインにしたかを一部紹介させていただくと、まず伊藤紺氏の展示スペースでは「短歌に没入できる空間」を目指した。岡野氏の短歌と言えば、一首一首の世界観に引き込まれる。私もお天啓を受けた「天才による凡人のための短歌教室」がそれである。同書は、短歌を詠むに当たっての心構えやコツなどが書かれた指南書のような本。読み進めるにつれて、短歌を詠んでみたくなったり、うまく作れるような気になったりするのだが（少なくとも私はそうだった）、その特異な読書体験を展示でも再現できたらと考えた。可動式の壁で長い回廊のような空間を作り、その両側の壁に大小さまざまなパネルを並べることで、読み進めることと歩みを進めることをリンクさせようと試みた。岡野氏の言葉や短歌を収めたパネルを、飛び石のようにひとつひとつ渡っていくことで、短歌の答えに近づいていける感覚を形づくってみてみたのだ。また、同書のどのページにも散りばめられている木下氏の短歌に向ける強い想いを際立たせようと、パネルはすべてモノクロとし、文字のみに観覧者の意識が向くようデザインした。総パネル数は六七。同書の内容をほぼ網羅したボリュームのある展示となった。

と、ここまで展示デザインの話を書かせていただいたわけですが、拙い言葉だけではなかなか伝わりきらない部分もあったかと思えます。イ

まれていく引力が魅力だと個人的には捉えており、それを観覧者の方に存分に全身で味わっていただくことを目標とした。ひと文字が手のひら大の一首を壁面の高さいっぱい配置したり、五面に一首ずつ据えた直方体（人の腰の高さほどある）を制作したりと、体ごと入り込める「短歌の部屋」を大胆かつ丁寧に仕立てていった。その部屋の調度品を統一するように、使用するフォントはゴシックで揃え、文字間や行間にも細心の注意を払った。

続いて岡野大嗣氏の展示スペースでは、主に岡野氏の第三歌集「音楽」からいくつかの連作を展示することが事前に決まっていた（連作の選択をこちらに任せていただいたのは大変光栄だった）。であるから、頭を悩ませたのも、いかに連作を魅力的に展示するか、ということだった。同時に常に頭にあつたのが先述した岡野氏からの言葉である。そこで行き着いたのは「連作を連作として見せる」というシンプルな答え。歌集の中の連作というのは、往々にして紙面の面積の制約上どうしてもページを跨いでしまう。もちろん、ページを捲っていきながら連作を読み進んでいく楽しみもあるが、連作の連続性がページを跨ぐことによって少なからず途切れてしま

ンターネットで「57577展」と検索していただくと、展示の様子を収めた画像がいくつか出てきますので、ぜひそちらも併せてご覧いただけますと幸いです。現在準備中の57577展2ndについても何卒よろしく願っています。

【出典】  
岡野大嗣「音楽」（ナナロク社・二〇二二年）  
木下龍也「天才による凡人のための短歌教室」（ナナロク社・二〇二〇年）

【57577展2nd情報】  
会期：二〇二四年四月二十日（土）  
～六月二十三日（日）  
会場：町田市民文学館ことばらんど  
観覧時間：10時～17時

観覧料：無料  
出品歌人：岡野大嗣、木下龍也、鈴木晴香、岡本真帆、田中ましろ、秋山智憲  
展示デザイン：秋山智憲  
協力：太田出版、ナナロク社



Twitter ハッシュタグ #うたそら

「うたそら」では Twitter での感想をお待ちしております。ハッシュタグ「#うたそら」をつけて、お読みになった感想をぜひお聞かせください。

次号予告

第20号

連作欄 8首の連作 自由詠  
 テーマ詠欄 「野」  
 一首評 「そらよみ」  
 短歌リレーコラム 「望遠鏡」  
 リレーエッセイ 「いちごいちえ」



短歌募集



第20号 24 4/30(火) 24時  
 ●8首の連作 自由詠 ●テーマ詠「野」1首

第21号 24 6/30(日) 24時  
 ●8首の連作 自由詠 ●テーマ詠「雲」1首

投稿先等、詳しくはうたそらのご案内ページをご覧ください  
<http://kohagiuta.com/utasora/>

編集後記

4月下旬の陽気かと思いきや、また雪が降りたりと気温の安定しない今日このごろ、皆さまいかがお過ごしでしょうか。くれぐれもお体には気をつけてお過ごしください。さて、短歌誌「うたそら」は2021年3月の創刊から丸3年となりました。今号より4年目に入ります。変わらず投稿し続けてくださる皆さん、初めましての皆さん、たくさんのご寄稿をいただけるからこそ、ここまで続けてこれていることを大変感謝しています。ありがとうございます。

次号は5月発行、テーマ詠のお題は「野」です。たくさんのお題を作品をお待ちしております。

編集鳥 千原こばぎ

今号のうたそら 第19号

- 参加歌人様 65名
- 連作欄 51名
- テーマ詠欄 49名
- 一首評 5名

ご寄稿いただきありがとうございます！

- コラム 秋山ともす さん
- エッセイ 奥村鼓太郎 さん



illustration: kohagi chihara

軒先のソフトクリームの置物に抱きつく男の子、お元気で

奥村鼓太郎



リレーエッセイ いちごいちえ

前号の人の短歌から一語を摘んでそれをテーマにエッセイを書くページ  
 今号のテーマと書き手さんは…

テーマ 子  
 書き手 奥村鼓太郎

子どもの頃、睡眠時間を除けば室内にいる時間よりも外にいる時間のほうが長かった。家の近くには海や川や公園があつて、時間が許す限りそこに居て、そこにあるもので遊んでいた。その頃は時計を持っていなかったから、というか必要がなかったから、太陽の位置や周囲の暗さで家に帰る時間を考えていた。家に帰るとご飯ができていたり、できていなかったりして、できていないときには料理を手伝うこともしばし

ばあつた。家ではすこし任天堂DSで遊ぶでお風呂に入つて眠つた。そのような一日が基本的には繰り返された。また、魚釣りをするようになつてからは、毎週海や川や池に行つて色々な魚を釣つた。釣れるかわからない魚を待ちながらぼーっとする時間は、今でもよい思い出として記憶している。それに比べて今は、と考へてみると、今もあまり変わらないかもしれない。今は大小学4年生で、一度留年して来年も4年生になる。就職活動やアルバイトなど、年相応にしなければならぬことをしている。今暮らしている家の近所に海はないが、川はある。川に行けば魚や鳥がいて、それらを見ながら歩いていると、今すべきことから距離を取ることができて落ち着く。そうして家に帰ると、しないといけないことは変わらずそこにある。あるけれど、さつき鳥や魚を見たからもう少し取り組もうと思える。そう思えるのは、子どもの頃の原体験



が作用しているのかもしれない。昔はよかった、と思うことはまだない。これから思うようになるかもしれない。けれど自然が身近にある限り、そう思うことはないだろう、とも思っている。



うたそら 第19号

発行：2024.03.01

編集・制作：千原こはぎ

@kohagi\_tw <http://kohagiuta.com/utasora/>